

「第四節」戦後現代詩第5期の北村太郎の詩 死者のコードによる詩の可能性と「荒地」の意味

「笑いの成功」が刊行された八十五年の翌年、鮎川信夫が死んだ。鮎川は良くも悪くも戦後現代詩が始まったときの「荒地」の状態をただ一人変えることなく継続し続けていた詩人なのである。ただ、それは詩人として生き続けることが不可能な生き方ではあった。詩を書く人という狭義の詩人定義に従えば鮎川には詩人として生き延びる可能性は人間としての死を迎えるずっと以前にすでに残されていなかったともいえよう。

その鮎川の死の更に翌年、北村太郎自身も多発性骨髄腫を発病する。戦後現代詩第5期（八十五年から九十五年）のうち北村太郎は九十二年までしか生きられなかった。しかもその期間の発端から、戦後「荒地」の発時点以上に、「死者」の問題に直面させられている。伝記的事象を作品解釈や批評に不当に反映させるようなアナクロニスムな手法を使うことの問題は十分認識しているが、北村の作詩手法にはこうした伝記的事象の発生タイミングが絶妙であることから得られたとしか考えにくいものが多いのも動かし難い事実である。特に「死」にまつわる事象にはその傾向が強い。北村がこのタイミングでこうした病気を発病したことは彼の詩を考える上で大きな意味があるはずである。

前節では、戦後現代詩第4期に他の詩人たちがそれぞれ自分にとっての、詩テクストを他テクストから峻別し「特権化」するための方法を「極端」化させ休むことなく変化させることでかえって詩の不可能性に直面していたのに比して、北村は独自の「中」的思想に基づいて詩を作成しており、その意味で詩の不可能性を回避していたとまとめた。北村を除く現代詩を巡る状況は瀬尾が

述べていたようにまさしくタナトスの宿命のままに進展してしまっていたのである。

北村のこの時期の技法は、書いている時点では不可視のコードを「予感」する手法だとまとめた。詩テクストは他テクストとは異なるコードによって書かれていなくてはいけない。問題はこの異なるコードをいかに定義するか、ということであった。「荒地」が戦後に「詩の幻の権威」を否定したあとに詩テクストを成立させる「特権化」の根拠探しをしたこともこうした、詩テクストを他テクストと峻別するコード探しであったと捉えることができる。

ここまでこの「コード」という語を私は定義せずに使ってきたので、ここで定義しておく。私はこのコードを「規範」の意味で使ってきた。詩テクストにおいて句同士が連接されるときに拠るべき基準のこと、として考えてきたのである。

北村太郎が「中」的思想から導き出した方法はこのコードの実体を明らかにせず、「予感」という「感覚」で「宿命を半分」先読みして詩テクストを書き、そのコードそのものは後で振り返って見出す方法であると述べた。そう考えて作詩することで北村は同時代の詩人よりも、そしてそれ以前の彼自身よりも、遙かに自由になり大量の詩を書いた。それは瀬尾のいうようなタナトスの回避でもあったわけだが、それは詩テクストを成立させるコード探しをやめてしまったことと見た目には何も変わらないという指摘ができる。

「予感」という感覚の正当性は事後から遡って保証されるとしているが、それは単なる「後付け」ではないのか、という疑念が残らざるを得ない。北村は詩テクストが書けなくなることは回避したが、結局また「詩の幻の権威」へと回収されてしまっただけではないのか、つまりその北村の「予感」という感覚の絶対性や

「特権化」は捏造にすぎないのではないかと考えられるのである。

それら第4期の北村の問題点を踏まえた上で、第5期に話を戻そう。北村は多発性骨髄腫を発病後、二冊の詩集を出している。死を予告されて、つまり生活にはつきりと期限つきの死が影を落とすことになってから出された詩集である。

これは戦後現代詩第1期における荒地の「戦争体験」とそれともなう「死者」の代弁、そして妻子の奇禍による「死者」との乖離ということ以上に特殊で個人的な一回性の「死者」にまつわる経験である。

そして前の二つと大きくことなるのはこれは忘却されたりどこかに先送りされたりすることが絶対に不可能な「死者」との関わりである点だと言える。この場合には「死者」「他者」ではない。彼の日常は死につつある（ことが確実である）人という特異な人間が暮らす日常ということになり、当然第4期の詩集で使われていた不可視のコードによる詩作成は「生者」が行う場合と全く同じような方法が使われていても、その意味するところは全然違うものとなってしまう。振り返ることが予定されている「未来」は存在しない可能性が高まっているからである。

そうした状況で書かれた詩集「港の人」について、飯島耕一は「さまよう詩『港の人』再読」の中で次のように述べている。傍線は後述する内容に必要なので私が付けた。

七歳上というのはまず同じような年齢で、同時にいつまでも兄貴格でやりにくい「港の人」について書いてみる。「港の人」を数日間まとめて再読して、このところないつよい感銘を受けた。

最近これほど感心して読んだ詩はない。さすが、北村太郎の詩でかけ値なしにこちらを打った。北村さんのこの十余年の詩の一つのまとめというか到達点のようでもある。つまり、「墓地の人」やいくつかの「センチメンタル・ジャーニー」、小詩集「おそろしい夕方」「朝の鏡」などの詩が、「わたしの町」とか「寂として」「春影百韻」とか「冬の当直」の饒舌体となり、そこから「眠りの祈り」「おわりの雪」「冬を追う雨」「あかつき闇」「ピアノ線の夢」「悪の花」「犬の時代」「笑いの成功」の膨大な詩、実は底のほうは悲愁にみちているのだけれど、表面は快活げな詩を経て、長詩「港の人」に突き抜けたわけだ。まだほんとの出来たてホヤホヤの詩なので感想程度のことしか書けないが、何やら饒舌体の詩、快活で活潑な詩を経て、もう一度初期に戻ったような感觸がある。読者は神妙になり、ある悲愁にとらわれないわけには行かない。（略）

いまは詩のダメな時代である。ノビ切ったゴムのような自由詩の時代だ。いわゆる戦後詩がいよいよ終わってしかもその次が見えて来ない空白時代である。その中でも、さまざまの工夫をこらして詩は書かれ、このところでは平出隆の「家の緑閃光」、松浦寿輝の「冬の本」、朝吹亮二の「ros」に感心したくらいだが、北村さんの長詩「港の人」を読んで安心させられるところがあった。「港の人」は、いわゆる定型詩ではないが、その底に、ある定型への意志のごときものがあり、読者はただの一行も動かすことができない。この定型への意志のようなものの見られぬ詩は詩ではなく、詩的感興の横書きにすぎない。

飯島耕一の発言はこの文章が書かれた当時彼が「現代詩も定型

を求めている「旨の主張をして所謂「定型詩論争」をしかけていたことに起因する。

最初の傍線部のように詩がダメになっている、自由だが弛緩している、という指摘をした後それに比較する形で、二番目の傍線部分にあるように北村の詩は「その底に」、つまり不可視の部分に「意志のごときもの」を内包していると言っている。そのため各行は必然性を持つているとしているのだが、それを飯島耕一は「定型への意志」として捉えている。

これは先述したような北村の「予感」する不可視のコードが飯島によって看破されたということだろうか。そうではあるまい。「暗号」詩で、各行の並びを規定するものであった、という意味で「読者に」隠されたコードであった「暗号」を私が見つけたように飯島が北村の不可視のコードを読んだ、とはいえないだろう。

飯島が北村の詩に「定型への意志」を見たことを誤読であるということとは容易い。しかし北村にとって書かれた時点では不可視であったコードならばそれが飯島のいう通りに「定型への意志」にすぎなかった、ということは無いと言い難い。北村自身に不可視であったものが読み手である飯島には見えるということ論理的に否定することは実はそれほど容易ではない。

この問題の根にはここまで私が不問にしてきたことが関係している。それは、詩のコードは誰によって規定されるのか、ということである。私は多く詩の実作者が詩について論じる場合に見られる傾向のように、飽くまで「書く側」からの論述を行ってきた。それは私が考察の対象としてきた人々、北村にせよ鮎川にせよ吉本にせよ飯島にせよ、こうした人々はすべて詩を「書く側」の人間であるため、そうした傾向に引きずられてしまったからで

ある。「荒地」が詩テキストを他テキストと峻別するためのコード探しをしていた、と述べたが、このコードもまた「書く側」のコードである。詩がいかんにして書かれるか、のためのコードであったのだ。「書く側」がそのコードの内容を明示しており、自分で把握しているのであれば、それは「読む側」のコードとも一致するはずである。勿論「読む側」は「書く側」の意図を常に考察し正解か不正解かを判じて貰わねばならない、ということを主張したいわけではない。しかしながら詩の場合は他テキストの場合と違い、「読む側」の自由にまかせるという姿勢は戦前詩にあつた何も召還しない好い加減な「隠喩」による詩法に対する禁忌がある以上事情は異なる。その禁忌から始まった戦後詩においてやはりコードを明示しないことは禁じ手であつたのだ。そして北村の不可視のコードによる詩法はそのコード判明が、仮に捏造ではないにしても、タイムラグによって齟齬を来すのである。

「書く側」のコードの不在（＝不明）は「読む側」のコードを不定ならしめる。北村にはその問題に対しての配慮が欠けていた。それは彼が詩を飽くまで「書く側」の問題としてしか捉えていなかったことに起因する。

それでは「読む側」はどのようなコードを「港の人」から見出す可能性を持つているのだろうか。

「港の人」は三十篇からなる長詩^{注十四}である。傍線、二重傍線は後述する内容に必要なので私が付けた。

7

無は一つみただけれど

^{注十四} 詩ではあるが詩集でもある。詩集「港の人」に収録されているのは「港の人」という詩だけである。

じつにたくさんある

必然をいくら細かく砕いてみても
ちつとも

偶然はでてこない

海の教訓は

とてもきびしい

でも

もつときびしくてもいいとおもいながら

午後やました公園をひとまわりして

部屋に帰って

静物の位置をすこしなおす

1 9

どのくらい前？

ほんのひと悲しみくらい前さ

a grie ago

と

ある詩人の言い方をまねてひとりごとをいってる

朝

やっぱり生は

死のやまいなんだよ

つまり

死は健全であつて

それが病気になると思になるんだ

世界は

死に抱かれているよ

あの世について未開人はたいてい暗いイメージを抱いているけど

ほんとにそこはそうなのか

あの世なんてありはしないし

仮にあつたとしても

こちらから見えはしない

朝

完璧に健康体である死を考えて

やまいである生を

薄い目でながめながら

だれにともなくきいてみる

きみ、いつから生きてるの？

どのくらい前？

傍線部にあるのは比較的抽象的な思考である。最初の傍線部にあるように、「必然」は「偶然」と本質的に違うものだ、という考えや、後の傍線部にあるように、「生」と「死」の希少性の反転について述べたりしている。この部分だけを取り出すなら、思想というには大仰さに欠け、アフオリズムとするにはいささかクリシエであり弛緩しているものに見える。

二重傍線部の最初のものには生活に関することが書かれている。これもこの部分だけを見るなら、ただの生活の一場面としか言えないだろう。

これらは単独で部分だけをみればそれだけのものである。特異なのはそれらが地続きのものになっていく点である。ありきたりかもしれないが生きることの根本に関わるようなある種哲学的考察と、還暦を過ぎた横浜在住の詩人の生活が、断続なく繋がっている様子が見事に「再現前」されているのである。そして、それは例えば二番目の二重傍線部の二つの連のように両方の要素が一体

になつてゐる奇妙な言動の描写を生む。北村がこうした詩を書くことが可能なのは、不治の病による確実な死の訪れを待つという状態にあつたからだと思像できる。

第4期の不可視のコードによる詩法との相違はその詩テクストの「書く側」が「読む側」にとつて変貌している点にあるといえるだろう。第4期の北村の詩は「書く側」である北村にとつてしか意味を持ち得ない詩であつた。北村の「日常」を「再現前」し、そこに書かれた時点では不可視のコードを「予感」で捕らまえていたのであるが、その詩を後に読んでコードを見出すのは北村のみであり、「読む側」には伺い知れない。「再現前」されているものも、結局それは北村という個人の極私的な「日常」であり、北村という人間に特別興味の無いものが「読む側」であれば、そこには何の意味も見出し得ないのである。

しかしながらこの第5期の「港の人」はそれとは異なる。「死者」「自己」あるいは「『死者』と『生者』の狭間の人」という非常に特権的で類い希な位置に身を置いていることで、その「日常」は、「生者」である「読む側」にとつて興味深い「非日常」のコードで括られた詩として「再現前」されるのである。

再三部分的に引用している、ヘミングウェイの短篇に言及した北村の文の結びに次のような記述がある。傍線は後述する内容に必要なので私がつけた。

しかし戦場での経験を負つた彼の、この短篇における探究は、生涯の分かれ目に立っているといふ、ある危機感を内蔵している。さきに引用した部分の、一種のいい表しがい迫力は、その危機感に裏打ちされたことによつて生じたのではないだろうか。わたくしが、この文章の実体的な感覚

の異様に、ヘミングウェイの運命を直感したのは、なぜであるか、よくわからない。感覚主義の虚無が、むきだしに出てゐるから、といえなくもない。ともあれ、彼の死を聞いたとき、すぐ思い浮かべたのは、この文章であり、この文章が自殺を直観させたのは事実なのである。彼の進む道は、「大きな二つの心臓の川」を書いたことによつてどうしようもなく画然と定まつてしまつた、というのがいまのわたくしの考えである。

傍線部で北村は、ヘミングウェイの描写にある異常な感覚の迫力は、「死」の側から記述された「生」の描写であつたからである、と言つてゐる。つまり「死者」のコードを用いた描写だつたのだ、ということだ。これはヘミングウェイがマス釣つて捌くときの描写のことを言つてゐるのだが、北村はそれを非常に生々しいものと感じたと思つてゐる。しかしながら、そこで描かれていた「生」が描くものを「死」へ追いやるのだ、という理屈にはおそろく誰しも首肯しがたいものがあるだろう。それにこれはあくまで北村が「読む側」としてそう感じていた、ということに過ぎないことにも留意が必要である。ヘミングウェイの「宿命を半分」「予感」しそこに「死者」のコードを見ていたということだが、それもまた「後付け」ではないことを証明できないものである。

だが、北村の思考を補足してこれを捉えることは可能であるう。ヘミングウェイの描写が「死者」のコードによる、というのは彼にとつて「生」が日常ではない、という認識から、つまり「生」を見慣れないもの、珍しいものと捉えて描写していると感じさせる部分があるからではなからうか。魚を日常的に仕事として捌く板前は魚を捌くことについて、仮に文才があつたにしてもこのようには書かないだろう。それはその作業が「日常」のこと

として自動化されてしまっているからである。ヘミングウェイが戦場に行っていたことを北村は指摘する。彼と他の帰還兵との違いは、非戦場から見れば非日常である戦場での生活も戦場では日常であり、戦場での日常から見れば非戦場の日常が非日常であるという関係の中で、多くの帰還兵が日常から日常への移動を果たしただけにすぎないのに対して、戦場の日常に適応した感覚の状態のままで、非戦場へと帰還したことにあると考えているのだらう。そうであれば見るものすべてが目新しく稀少なものとみえ、その驚きを表出した「再現前」を「読む側」の前に提示することが可能になる。戦場で日常的なのは「死者」であり、非戦場で日常的なのは「生者」である。よってヘミングウェイの描写は「死者」の側からの「生者」の側の描写だといえるのだらう。

「荒地」の詩は「生者」である「荒地」同人たちが、戦争やそれにとまなう事象のうちに「死者」となった友人たちを代弁して擬似的に「死者」の側から、自分たちを含まない「生者」への抗議を発するところから出発した。ここで擬似的というのは「荒地」の詩人たちは「死者」ではないからである。この方法が様々な事情やこの方法自体が持つ不可能性から瓦解したことは述べた。

北村は妻子の奇禍による喪失事件によって「生者」は「死者」足り得ず、代弁することの不可能性を認識して「死者」の側に立つという「特権性」に拠らない詩の可能性を探った。多くの現代詩人たちも様々な方法で行っていた状況があった。「荒地」同人では鮎川だけが「死者」である森川と合一すること、「生者」の外に立ち続ける姿勢を維持したが、それは詩を不可能ならしめた。

「荒地」が持っていた問題意識とは「詩の幻の権威」を否定し

たあとに自律する「特権性」を持った詩の可能性を探求することであったといえる。その意味では「死者」との関係という軌を取り外された戦後現代詩は、ほとんどすべての詩人がこの「荒地」の問題意識を継承したといえる。しかし、現代詩は結局「詩の幻の権威」の内部へ戻る選択と、「平準化」の進行の中で「特権性」を否定しながら尚も「特権性」を追求するという矛盾の中で表現の不可能性に直面し詩をやめる選択、という二つの選択肢しか残されていないかのような状況へと陥っていった。こういう状況下で「荒地」の可能性は第5期の北村によって一つの達成を見ていたのではないかと指摘できる。

これは、「死者」の側から書かれる、ということをして「死者」のコードを用いる、と表現するが、「死者」のコードということがすべての人間に「平等」に開かれていながら「特権的」であることを同時に可能ならしめるコードである、といえるからである。「死者」のコードはすべての人間に習得の道が保証されていないが、なおかつ「生者」に対しては「特権的」なコードであるといえるのだらう。

結局戦後現代詩第1期から第5期まで五十年間かけて進展した現代詩は、また最初の「荒地」が扱った「死者」との関係という軌へと舞い戻らねば先に進めない状況にあるのだ、と言える。

北村太郎の最後の詩集は「路上の影」である。この中の詩には確かにヘミングウェイ的「死者」のコードからの描写とおぼしきものが見られる。傍線は後述する内容に必要なので私がつけた。

単純な一日

ヒヨドリが

サザンカの白い花をついばんで
勢いよく上にほうり投げた
遊んでいるのか

おこっているのかよくわからないけれど
きつとなにか意味のある行動なのだ
そのあと

枯れたヒメリンゴの枝にひよいと移り

くちばしを

枝先の左右へ交互にこすりつける

研ぐようなその動作は

すこぶる早いけれど

くちばしをとちゅうで枝にひっかける失敗なぞ

一度もなく

まったく動きにむだがない

ぼくは窓から庭を眺めながら

ヒトはむだをするからヒトなのだなと思う

きょうも

頭をかいいたり頬づえをついたり

匙でゆっくりコーヒ―茶碗をかきまわしたりした

習字をしたり

ひとりごとをいったりした

白い花のかわりに

青い叫びを天井に向けたりした

傍線部に見られる描写はヒヨドリの動きを実体的に生々しく
「再現前」しているようには見えないだろうか。これも「港の
人」同様、生活描写とアフォーリズム状の言説との混合によつて作
られた詩テクストである。ここで描かれるヒヨドリの動きはただ
正確に描写されたものでもなければ、詳しく描写されたものでも
ない。そうでありながら生々しく見えるのは、「死者」に限りな
く近づいた場においてこれを眺めた北村の眼に映る光景を見事に

「再現前」しているためなのである。詩に「死者」のコードが
織り込まれることによつて生の実感が表出しているのである。

しかし、やはりこれは、「生者」である「読む側」には結局
「死者」のコードの正体は不可視のままであり続けるものな
だ、という問題点に眼を瞑った場合に言えることにすぎない。

「死者」のコードという方法は、「書く側」には書くことの可能
性をもたらずかもしれないが、「読む側」にはやはり読むことの
不可能性としての詩の不可能性の問題を残すのである。

第二章の補足

【一】北村太郎詩集の目次

1

墓地の人

微光

センチメンタル・ジャーニー

センチメンタル・ジャーニー

雨

2

毒麦 ゴツホに

Drive and Preciousまたはやさしい人

地の人 失業者の独唱・一九五一年

庭

3

終わりのない始まり1〜4

4

センチメンタル・ジャーニー

黒いこびと

小詩集1〜4

ちいさな瞳

小さな街の見える駅

ヨコハマ 一九六〇年夏

5

おそろしい夕方

鳥

朝の鏡

存在

ある墓碑銘

冬へ

解説 鮎川信夫